

ファッションの情動性が人間の心理生理に与える影響

The Effects of Emotions Arising from Fashion on Psychological and Physiological Responses  
of the Human Body

小柴 朋子<sup>\*1</sup>, 田村 照子<sup>\*1</sup>, 永井 伸夫<sup>\*1</sup>, 森 由紀<sup>\*2+</sup>, 綿貫 茂喜<sup>\*3+</sup>  
Tomoko Koshiba<sup>\*1</sup>, Teruko Tamura<sup>\*1</sup>, Nobuo Nagai<sup>\*1</sup>, Yuki Mori<sup>\*2</sup> and Shigeki Watanuki<sup>\*3</sup>

\*1 文化女子大学服装学部 東京都渋谷区代々木 3-22-1

Faculty of Fashion Science, Bunka Women's University

3-22-1, Yoyogi, Shibuya-ku, Tokyo, Japan

\*2 甲南女子大学人間科学部

Faculty of Human Sciences Konan Women's University

\*3 九州大学芸術工学研究院 福岡市南区塩原 4-9-1

Faculty of design, Kyushu University

+ 服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

**Abstract:** Fashion brings pleasure to people and provokes strong emotions in them. However, there is difficulty with measuring the effect of fashion on human emotions. Recently, method which objectively measures the effects of stimuli on the physiological activity of the human body has been developed. In this study, how fashion affects the psychological and physiological condition of the human body will be examined. Additionally, the effect of wearing clothes or looking at fashionable clothes on this activity will be measured.

### はじめに

服飾は人の心を豊かにする。言い換えれば、豊かな人の心は服飾に自ずから反映するといえ、人の心の平安と衣服との関係は密接である。一方、人の心の有り様は身体に影響を及ぼす。衣服は今や身体の一部として、人の一生の時間のほとんどを身体の最も身近な事物として存在する訳であるから、その心身に及ぼす影響は計り知れないところがある。意識する、しないに関わらず、服飾の果たす役割は非常に大きい。しかし、残念ながらファッションが人体に及ぼす影響として心理的効果と生理的反応の双方に着目した研究の蓄積は多いとはいえない。

いかなる服装が人の心を捉え、その時、体にはどんな変化が生じているのかに対しては、多くのファッション関係者が関心をもつところである。今までは、服飾に対する感性は、主として言語により主観的に表現されてきた。近年、感性を生理学的に評価する手法が開発され、様々な分野で応用されるようになってきた。この先進的な客観的評価法を応用し、ファッションによる人体影響を心理生理学的に計測して、服飾による心の変化の客観的把握をめざしたい。

---

\*1) [koshiba@bunka.ac.jp](mailto:koshiba@bunka.ac.jp)

## 方法

共同研究会議を開催し、各研究担当者の担当領域を明確にし研究課題を各自検討する。  
 研究期間を通しての研究手法：1) ファッション性に対する人の意識調査を心理学的手法を用いて実施し、快あるいはストレスを感じる場合の典型的なスタイルを抽出する。2) それらのデータを基に、着用者が快あるいはストレスを感じる服装を身につけた場合、あるいは第3者が見た場合の、人体への心理的効果や生理的影響を観察する。3) 結果をもとに、心理評価で得点の高いファッションやホルモン分析によるストレス値の低い衣服あるいは交感神経活動を亢進させる着装を対象に統計処理し、それらの共通点を探り高感性的な服飾の要素を明らかにする。個人による差、地域差・年齢差などファッションに対する感受性の集団としての特性の解明や、国際間でのファッションに対する共通の評価法としての提案を図る。

本年度は、ファッションによって引き起こされる強い感情について討議し、研究の方向性や今後の研究方法の可能性について検討を行う。

## 今年度の活動

共同研究を2回開催した。その議事録を下記に記す。

■第1回会議 平成21年1月29日(木) 15:30~17:30 文化ファッション研究機構会議室(F館4階)

出席者：小柴朋子, 田村照子, 森 由紀, 野口京子, 安永明智, 永井伸夫

内容：平成20年度実施計画書配布。研究目的および概略説明。

- ・ 研究構成員として、文化女子大学現代文化学部健康心理学の野口京子氏と安永明智氏に参加いただき、心理的な研究手法についてアドバイスを受けることとなった。
- ・ 研究の方針について、*fashion* への欲求に関する先行研究を調査し、研究の背景を探る。仮説を「自分が気に入った服を着ると心理的に影響を与え、日常の生活活性をあげることに繋がる」あるいは「ファッションは人間が生き生きと生きていくためのツールとなりうる」とし、その検証を試みる。
- ・ 今後の方針について検討した。3年間を通して、“Fashion is subset of emotion.”・・・ファッションがヒトの生理機能の活性化に貢献するかについてアプローチする。

■第2回会議 平成21年3月9日(月) 10:00~12:15 文化ファッション研究機構会議室(F館4階)

出席者：小柴朋子, 田村照子, 綿貫茂喜, 森 由紀, 野口京子, 安永明智, 永井伸夫

配布資料: ストレスとバイオマーカーの挙動に関する文献。唾液ストレスマーカーに関する文献。

(1) ファッションの情動性に関わる因子を抽出・整理するための方法の検討

- ・ いわゆる勝負服を提示させ、共通項をピックアップし、生理学的指標に反映するが検討する。好みの服、部屋着、ダサイ服を着用時のHRVと唾液中ストレスマーカーを検討する。

(2) 研究内容の今後の大要と対象者の検討

- ・ 「ファッションはヒトの健康において重要性が高い」という理念のもとに、科学的エビデンスを検証する。ストレスが大きいと考えられる①乳幼児を持つ母親、②高齢者、③看護師などを対象として、ストレスマーカーの挙動をみる。対象者を広く取ったアンケートの実施にむけて、アンケート項目の検討を行う。

(3) 今後の方針：平成21年度は質問紙調査により、心理学的評価を行う。ストレスマーカーなど、生理学的指標の相互関係について検討し、マーカーの挙動を考慮した上で、研究を進める。

## 今後の課題

- ・ 心理学的分野において、質問紙調査における対象者の検討を行う。
- ・ 生理学的分野において、実施に向けて実験手法の検討を行う。
- ・ 平成21年4月25日(土) 文化ファッション研究機構 会議室(F館, 4階)にて第3回会議を予定。